

1 直近の活動

10月4日(金) 北海道全国大会・部会見学会「北海道科学大学」

10月5日(土) 北海道全国大会総会、懇親会

10月13日(日) 幹事会

10月19日(土) (個人的話ですみません)「金属がよくわかる事典(第三版)」の発売日でした。でもこの日はプライベートでした。詳しくはP E11月号の著書紹介に載ります。

10月20日(日) 金属学会春季講演大会シンポジウムキックオフ(1回目)&2025年2026年執筆者説明会

10月20日(日) 企業内技術士勉強会(第20回目)とBOR議論、技術者倫理講義

10月27日(日) 定例部会・機械振興会館

2 今後の活動予定(直近1ヶ月分)

11月3日(日) 幹事会1430～

11月10日(日) 企業内技術士勉強会(第21回目)とBOR議論、技術者倫理講義

11月16日(土) 1300中部本部定例部会

11月17日(日) 1430金属学会春季講演大会シンポジウム打ち合わせ(2回目)

11月24日(日) 1300セミナー13「歴史金属学2」

11月25日(月) 部会長会議

3 部会四方山

▶忙しいとは、心が亡くなることと言われたことがある。これは間違いだ。忙しさは、心の墓場ではなく心のオアシスだ。大体、忙しい時には、余計なことを考える暇もなく、次々襲いかかってくるモンスターをやっつけ続けるだけだ。暇な時ほど自分探しを始めて、方向性を見失う。もちろん、忙しさに押しつぶされては話にならない。どれも破綻しないギリギリの線を見極めて、破綻寸前で目の前の課題をこなしていく。一つ一つの出来栄えなんか気にしない。相手が不満に思わなければいいだけだ。経験的には、破綻するのは、自分を出した時だ。自分にこだわると途端に物事はストップする。忙しい時には自分を消して、ひたすらモンスターをやっつけることに専念する。バトルの最中によそ見をしたり話しかけられて中断すると碌なことが起こらない。▶しかし、ピークは必ずやってくる。それも1つ2つのピークならいいのだが、10個くらいのピークが一時期にやってくる経験を10月の最初にした。会社の設備予算と消防署へ飛んでいく事案と労基署へ平謝りしながら書類を提出するのとISO監査とややこしい技術検討が群れをなしてやってきた日、設備がぶっ壊れたので見て欲しいと現場が呼びにきた。そのあとは天井の雨漏りをなんとかして欲しいと現場が押しかけてきた。10月発売の事典の第三版の最終編集と校正が一度にやってきた。さらに社長の代筆で講演資料を作り、動画を探して欲しいだの時間を詰めて欲しいだの色々指示がきた。そしてその日がTBSの番組監修の原稿締め切り日だった。

それに春のシンポジウムの企画書をこの日までに書かなければならなかった。もうあと数日で北海道という時期だった。さすがの和鐵も手帳にその日のやることリストが3ページにまたがってびっしり書き込まれたのは経験なかった。▶北海道は素晴らしかった。なんとかモンスターをやっつけ、10月3日の夜行便で新千歳に着いた。羽田空港のANAラウンジで仕事をするのは、コロナ以来だったが、大好物の牛乳とトマトジュースとおつまみで数年間のブランクは解消した。コロナ前は、それこそANAラウンジは年間数十回利用していた。全国の製鉄所に最も安く早く出張するのにANAは欠かせなかった。その時の名残りで、ANAのラウンジは今でもビジネスクラスで出入りできる。帰りに利用した新千歳のANAラウンジはコロナ前はまだ改装中だったので、おしゃれになったラウンジにちょっと感動した。また戻ってきた感だ。▶これから北海道には何度も行かなければならない予感がする。北大で学生に鉄の魅力について語って欲しいとの要請と、来年の金属学会春季講演大会に技術士セッションでシンポジウムをさせてもらうお礼に「当然、秋の北海道の講演大会にはきてもらえるんでしょね」とのプレッシャーで、新千歳を利用することになる。▶10月4日の北海道科学大学での講演会と大学の見学会は、見ごたえ聞き応えのあるものだった。札幌近くの広大な敷地に広がるキャンパスに溢れかえる学生もすごかった。ここで2011年来の我が愛車リーフと一緒に展示してあるT型フォード、なんとまだ走れるものを見れたのも収穫だ。今売り出してくれるなら、躊躇なくリーフでなく素晴らしいフォルクスのフォードを選ぶ。クラシックは不滅だ。▶全国大会は、まあいつもと同じ感覚。前日の見学会が北海道科学大学になったので、少し余裕ができた。小樽まで足を伸ばせなかったが札幌場外市場で魚三昧の大散財をしてしまった。夜はサッポロビール園でウェルカムパーティだった。ジギスカン爆食いも久しぶり。腹一杯食べていると多幸感に包まれ、つい数日前までのゴタゴタをしばし忘れる。酔っ払ってのすすきのホテル（というより外国人がいっぱい泊まっているカプセルホテルに近いもの）に戻るまでの間、電車駅前の百貨店の赤ちゃんのパンパースの棚の前で警備員に起こされるまでどこをどのように歩いたのか記憶がない。（なぜそこで寝ていたのかのも不明だ）でも帰巢本能だけは酔っていてもどこでも働らしく、次に気がいたらホテルで寝ていた。▶翌日は、ちゃんとしなくてはと正装で出かけたが午前午後通して座っているだけなのでずっと爆睡していた。でも大丈夫、夕刻には体力が復活し、懇親会は大はしゃぎできた。山東昭子さんとのスナップショットもいい思い出だ。北海道でラーメンを食べるものではないと職場の同僚から言われていたが、懇親会のみそラーメンは絶品だった。▶すすきのから新千歳までの高速バスで隣に座った90歳のオヤジがすごかった。見ず知らずの和鐵に自分の人生をずっと語り続け、前の席のにいちゃんが「あのお、うるさいんですけど」と言うまで物語を続けていた。これからタイに戻るらしい。70の時に奥さんと死別し、子供もいなかったものでタイに住みつき、そこで現地の人と結婚し、その2番めの奥さんとの間にうまれた娘さんが現在、北海道の大学に行っているので会いにきたという。なんだかヴァイタリティあふれるご老人だった。どこかの製薬会社の研究員をしていたといていたので、きっと不老不死のくすりでも発明して飲んでいるんだろう。新千歳空港でもグランドパーサーのおねえさんに大声で話しかけながら、タイにもどる便のことをきいていたのであながち妄想でもなかったんだと感心した。上には上がいる。まだまだ和鐵など足元にも及ばない人がごろごろ日本中にいるのだろう。こうおもうとちょっと元気がでてきた。

5 和鐵管見38

▶ピークが過ぎると気が抜ける。和鐵の年間ルーティンはピークが次々押し寄せるので、その度に気が抜けている。つまり年間を通していつも気が抜けていることになる。▶抜けている時は、机に向かう気力がなくなり、自室に帰れば寝転び、出かけると図書館から読めやしない分量の本を借りてき、映画館のハシゴをし、Amazonプライムを見続ける。ということは、いつも遊んでいる状態になる。たまにフィットネスに行くが、たまのため、ウエイトトレーニングが度を越してしまう。翌日はなんともないのだが、2日目、3日目で腕が上がらず、足やお尻の筋肉がパンパンに腫れ上がってくる。4日目が最高潮の筋肉痛になる。▶最近、あと何冊、本が読めるのか、あと何本映画を観れるのか不安になる時がある。海老名図書館の地下に夜に行くとかなりの人数の高齢者が本を読み耽っている。和鐵もあんな風にゆっくり本が読める日が来るのか。くる前にくたばってしまいそうな予感がする。和鐵の本のジャンルはぐちゃぐちゃだ。先月、生まれて初めて村上春樹の「ノルウェーの森」を読んだ。これは学生時代に読むべき本だった。でも時代が丁度和鐵の大学時代に被っているので、少し遅れて読むことになったのかもしれない。これだけどうでもいいことをグタグタ書ける村上春樹に感心した。まあ、個人的には村上龍のちょっとアブない小説の方が好みだが。こっちは昔、無茶苦茶乱読した。超電導やらコインロッカーやら今でも怪しい雰囲気の小説が良かった。次に井上靖の「敦煌」を大文字版で読んだ。映画ではみたが、本でちゃんと読んでないことに気づいたので読んでみた。映画で戦いの前に「碑（いしぶみ）の裏に部下の名前を一人ひとり掘る」と隊長が演説するシーンがあった。あのシーンは忘れられず、2008年くらいに会社で「品質機動班」という大人数の三交代組織を作ったとき、最初にやったのがそのシーンの再現だった。大きな木板を買って来させて、表に品質機動班と揮毫し、裏に新規に集めた機動班25名全員の名前を筆で書かせた。「お前たちの名前はこの看板の裏に永遠に残るのだ・・・」小説を読んでいるとそのシーンで昔の記憶が蘇った。▶この文章を書いている最中に和鐵の原理が発動した。「懐かしくて会いに行った人が死んでしまう」定理だ。なんと、映画の主人公のひとりの登場人物である西田敏行が突然亡くなってしまった速報が流れた。久しぶりに『敦煌』の映画を見たくて引っ張り出して真夜中に見たちょうど次の日だった。▶その次に読んだのは、レイモンド・チャンドラーの「大いなる眠り」だ。ハードボイルド小説が突然読みたくなってまずは古典として借りてきて読んだ。ハードボイルドは和鐵が好むジャンルだが、自分がそうでないのでちょっとモヤモヤ感が強い。いつか「君の瞳に乾杯」と言って彼女（妄想ですが）に杯をあげ、その彼女（妄想ですが）がまとわりついてきて「昨日はどこに・・・？」「そんな昔のことは覚えていない」「今夜、会える？」「そんな先のこととは分からない」と言ってみたいと思う（わかるかなあ、わからないだろうなあ。映画「カサブランカ」のボガードのセリフです。でも、数年前、まだコロナの前に、クルーズ船ノルウェージャン・ジュエルに乗った時、夜のバーでピアニストが弾き語りをしていました。「カサブランカ！」とリクエストしたら「時の流れるままに」を歌い出して、痺れた経験がある。▶本の話はそろそろ切り上げよう。あとは、清水義範の本を3冊ほど。清水義範の「国語入試問題必勝法」は和鐵の大学入試の時のバイブルだった。絶対でまかせな

んだろうが、影響を受けたには間違いない。数十年ぶりに再会し、こちらはこれからハマる可能性がある。この文章が和鐵の理想形だ。▶先月19日が誕生日だった。色々用事があり自宅に帰らなかったが、なんと68歳になって初めて女子プロを見に行った。この歳になると女子プロというとゴルフと思うかもしれないが、さにあらず。女子プロレスだ。ベルサール新宿グランドでスターダムニューブラッド16に出かけた。会場で大勢と見るのは、2012年に宮崎奈穂子が武道館単独ライブをやった時、「Birthday Eve」をライトを振りながら歌った時以来だ。路上シンガーの宮崎奈穂子の快挙を応援しに行ったのだった。▶女子プロになぜ行ったのか？それは水森由菜（ゆうな）の試合が目的だった。10月の最初の気が抜けた時期にアマゾンプライムで見た「半澤直美」の主人公だ。この映画で、和鐵は水森由菜のファンになってしまった。まだ、女子プロレスに転向する前のアイドル時代にみた映画だ。映画は、例によってみない方がいいかと思うが（一応コメディなんだが、なんか全体的に中途半端で、歌だけが気合いが入っている超格安の三流映画だ）この明るくめげない姿勢にファンになった。もうアイドル活動はやっていないので、しかたないのでプロレスを見に行った。生まれて初めてピアでチケットを買い、セブンイレブンで入場券を印刷してもらい会場に向かった。19日は自宅に帰るつもりだったがその日はシロ子さんが終日学童保育でどこかに出かけているので時間が空いた。最初は春のシンポジウムの説明会を19日に入れようとしていたが、執行役連中のアドバイスで、翌日にまわし、その日は女子プロレスを見に行くことにした・・・続きはまた今度。